

京都大学における図書館資料 保存ワークショップの取り組み

天野絵里子

【ワークショップの概要】

「図書館資料保存ワークショップ」は、京都大学の図書館スタッフ有志による、資料保存に関係する技術・知識の自己研さんの場だ。通常は週に一度、仕事の後に数名が附属図書館の一室に集まり、めいめいに自館の破損した本や雑誌などの資料の修理をしたり、情報交換をおこなったりしている。技術的な指導の中心は、花園大学教授であり京都大学の図書館員のOGでもある堤さんだが、レクチャー形式ではなく、参加者各自がそれぞれの資料に取り組みながら、お互いに教えあい、方法を模索しつつ、作業を進めている。

ワークショップの運営費用はほとんど材料費のみ、定期的会費もなく、必要があれば、参加者に1回100円程度「募金」してもらおう。修理に必要なプレスなどの大型の設備や和紙や糊などは、ひと通りのものをそろえている。堤さんが京都大学図書館機構の研究開発室員として委嘱を受けている関係で、現在は研究開発室という部屋を会場に使わせてもらっている。

【ワークショップの歩み】

ワークショップの始まりは、当時私の所属していたシステム管理掛の部屋で、堤さんを含め4人が集まった2003年11月ごろになる。

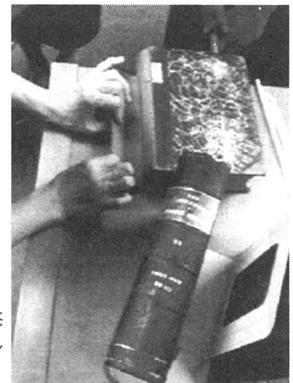
最初からワークショップの明確な目的があったわけではないと思う。当時私は、学内に多数ある図書室で、スタッフが必要に駆られてそれぞれに独自の方法で資料の修理をしているが、必ずしも正しいやり方でおこなわれているわけではないということに危惧を感じていた。かといって私自身が正しい方法を身につけているわけでもなく、資料保存について興味はあるが、基礎知識があるわけではなかった。京都大学は

600万冊もの資料を抱える。しかし、資料保存について責任を持つ部署も専門的な技能をもつスタッフもいない。では、図書館の枠をこえて資料保存に関心をもつ、または実際資料の修理をしているスタッフが集まって、まずは手を動かす作業を通じて情報交換をおこない、一緒に理解を深めていければよいのではと思った。堤さんも同じような志で、ワークショップ発足の中心的な役割を担ってくださった。

その後、個人的に声をかけたり、すでにあった若手の勉強会のネットワークを活用して広報したりで、ワークショップの参加者を募った。毎回概ね2～8名程度の参加者があり、入れ替わり立ち替わり、学外の方も含めると、今まで参加したことのあるスタッフの人数は、40名に達している。もちろん、継続して参加するかもしれないかも自由なので、一度しか来ていない人から、毎週ほとんど欠かさず来ている人もいる。

ワークショップを通じてより多くの図書館員が少しでも資料保存の技術と考え方に触れるということが目的の一つでもあると考えていたので、このように細々ではあるけれども継続できていることは、大きな成果だと感じている。

後にも書くが、近年になって、資料保存を主題にオフィシャルな業務研修や講演会が開催されたり、ワーキンググループが発足したり、海外出張が実現したりしている。こういった、京都大学図書館の実務としての資料保存活動に、私たち図書館職員有志の自発的なワークショップの活動がどれだけ影響しているかわからないが、もし少しでも貢献できているのであれば、非常にうれしく思う。



背がとれた洋図書の修理。手前はクルーセルを塗った洋書。

【ワークショップでの取り組み】

まずは破損した資料を保存箱に入れることが有効であろうということで、中性紙による箱の試作といった作業から始めた。他に、無線綴じでページがばらけた資料や、背が取れた資料、表紙外れやノドの緩みなどを修理するため、小原由美子さんの『図書館員のための図書補修マニュアル』などのマニュアルを参考にしながら、実際に資料に手を加える修理を実践していった。

どの図書館でも悩みの多い、古い革製本のレッドロット対策も、(有)資料保存器材のホームページで提供されていた方法¹を参考にして取り組んだ。

こうしてワークショップで模索しながら実践した対策の経験は、職員向けの実務研修にも活かされて、「無線綴じ」と「革装幀本」の2度の研修がおこなわれ、堤さんやワークショップの参加者が講師を務めた。

貴重な資料を所蔵する学内の図書室の見学もおこなった。京都大学には多くの図書館／室があるが、他の図書室はもとより、普段は自分の図書室でも貴重資料の保管環境まで詳しく把握しているスタッフは多くない。見学会を通して、学内の保管環境の現状を部分的ながら把握することができた。

2004年末、学内の図書館で水道管破裂により多くの資料が浸水事故にあった時は、一部の被災資料のためにカイルラッパーを制作するのを手伝ったりもした。

2006年10月にはアメリカ、ケンタッキー州立大学図書館のコンサベーター、日沖和子さんの訪問を受け、アメリカの大学図書館の資料保



存部門で一般的におこなわれている図書修理の方法のショートレクチャー、それから、書庫環境へのアドバイスをいただいたりもした。

ところで、このワークショップでは、2005年11月からブログを開設し、ワークショップ開催に関する事務連絡はもとより、複数のメンバーが毎回の記録、役に立つ文献や資材の紹介をおこなっている。ワークショップで得た情報や経験が不特定多数の方にも役に立つのであればとの思いもあったし、コメントで他の機関の方と交流できればとの意図もあった。実際、ケンタッキー州立大学の日沖さんと知己になれたのはこのブログを通じてであり、問合せや専門家の方からの助言もお受けすることができ、大いに役に立っている。

ワークショップでの具体的な取り組みはこのブログで写真付きで紹介しているので、ぜひ見ていただき、ご意見・ご感想や有益な情報があれば、お寄せいただければ幸いである。

「図書館資料保存ワークショップ」ブログ
<http://kulpcws.seesaa.net/>

【ワークショップから派生した活動】

毎週のワークショップだけでなく、それと関連して、ワークショップ参加者がそれぞれに独自のネットワークを活用して、資料保存に関係する活動につなげていっている。

2005年末から2006年初めにかけては、ワークショップ関係者も含む数名が、インドネシアの国立公文書館で、2004年のインド洋津波で被災した土地台帳を修復しておられる坂本勇さんを訪ね、作業のお手伝いと、被害の後も生々しいアチェ州の図書館へ訪問するなどした。

2006年末、京都大学の図書館では、研究開発室の堤さんのもと、「資料保存ワーキンググループ」が立ち上がり、全学的な保存ニーズ調査を実施、報告をおこなった。そしてそのワーキンググループに関連して、2007年3月には、私も含め、京都大学の3名のスタッフと堤さんが、ケンタッキー州立大学の日沖さんの多大なご尽力のもと、現地にて約1週間の資料保存研修を受ける機会に恵まれた。

【これからのワークショップ】

この稿を書くにあたって初めてワークショップの活動を振り返り、あらためて当初の目的を再確認した。明確できちんとしたゴールもなくただ目の前にあるものを何とかしたいという意志だけで淡々と続けてきただけのような気がしていたが、いくつかの成果は形に残せているのではないだろうかと、うれしく感じられる。これからもワークショップは、参加者のニーズに応じて少しずつ内容を変えながら、続けられる限り継続していきたいと考えている。

本来ならば、京都大学図書館のような規模であれば、専門的な技術と知識をもつスタッフが、

業務として資料保存に取り組む何らかの体制があるとよいであろう。しかし現状では、すぐにそのような仕組みは実現しない。有志によるワークショップの活動が、図書館員全体の資料保存に関する知識や意識の向上のために、少しでも助けになればと思う。

(あまの えりこ・京都大学附属図書館)

i 永島真帆子. 革装幀本を和紙で治す ver.2.0. 資料保存器材ウェブサイト. 2007-1-26.

http://www.hozon.co.jp/staff/chikara/nagashima/nagashima_repair_with_washi01.html,

(参照 2007-05-06).

